

Una delle più prestigiose case editrici storiche giapponesi, la SHINCHOSHA Publishing CO. LTD fondata in Tokyo nel 1896, ha riconosciuto Dorian Marcucci come uno dei migliori artigiani creativi italiani, ed il migliore nel settore creazione delle calzature artigianali. La casa editrice ha reso omaggio al maestro Marcucci dedicandogli oltre al fronte e retro del libro 8 pagine all'interno, descrivendo minuziosamente tutto il suo percorso lavorativo-artistico, emozionando i lettori anche con illustrazioni fotografiche di altissima qualità.





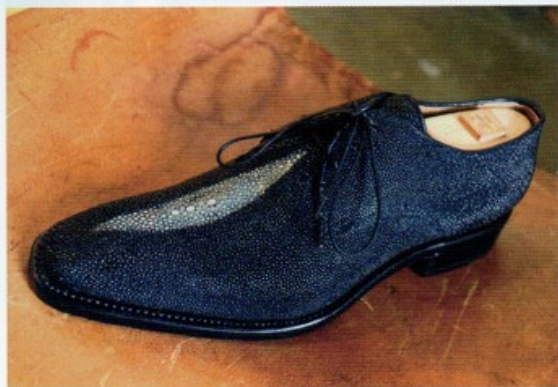
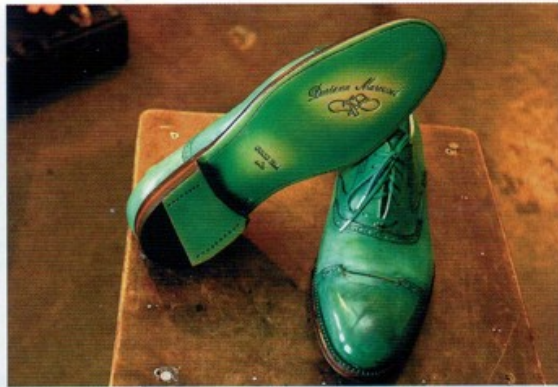
ソール周りに見える三つ編みのような太いステッチは、ノルヴェジェーゼ製法の特徴のひとつ。2011年にイタリア建国150年を記念してマルケ州に捧げた1足。靴底に三色旗が翻る。



靴職人のドリアーノ・マルクッチさん。
この扉の向こうで、世界にひとつだけ
の靴が誕生する。

1 手縫いの靴工房

マルケ州フェルモ県モンテグラナード



[右上]グッドイヤー・ウェルト製法による1足。最低でも20回は色を重ねて染める。[右下]履き込んだヴィンテージ感を出すためのグラデーションも技のひとつ。[左上]前ローマ教皇ベネディクト16世に捧げるべく製作したもの。金の教皇紋章が光る。[左下]エイ革は耐久性に定評があるが、その硬さから加工には高度な技術が要求される。

かつて「イタリアの奇跡」と呼ばれた時代があった。

第二次大戦後、国民投票で王制から共和制に移行したイタリアは、戦争の傷跡から立ち直り、未曾有の経済成長を遂げた。それを支えたのは、大量生産方式を導入して輸出も積極的に行った製造業だった。主に北部を中心とした自動車、タイプライターなどのオフィス事務機器、そして工作機械などの産業である。

テレビからは今日でも愛されている「ヴォラーレ (Volare = 飛べ。原題: *Nu blu dipinto di blu*)」をはじめとするサレンモ音楽祭の甘いメロディが流れ、都市のイタリア人は繁栄に酔いしれた。その時代を、今も人々は *Miracolo* (奇跡) と呼ぶ。

実は「ヴォラーレ」の歌詞をたどると、恋の幸せを謳歌したあと「世界は遠い彼方に消えてゆく」と続く。だが、人々はそれを忘れていた。1969年「熱い秋」と呼ばれた労使紛争が勃発



「上段」っておきの作品は、下駄箱をレストアした。宝箱。に保管している。「下段
右上木型には、顧客の足を採寸して一から作りあげるものと、ベースとなる汎用型
を加工する2タイプがある。「下段右下」革をパーツごとに裁断し、ミシンで縫製した
甲革（靴底を除いた上の部分）。「下段左上」師匠は自分のイニシャルを入れた道具を遺
してくれた。「下段左下」ハンマーで叩いて革に穴を開ける道具。



すると工場従業員の賃金が一気に上昇し、苦境に陥った。そこに石油危機が追い討ちをかけた。無限と思われた繁栄の夢は打ち砕かれ、再生には後年かなりの時間を要したのだった。

そのとき、同じ製造業でありながら、揺るぎない世界がイタリアにはあった。職人たちによる手工業である。とかく「古代から続く歴史の国」と紹介されるイタリアだが、近代国家としての歴史は浅い。ようやく国家統一が成し遂げられたのは、日本の幕末にあたる1861年。そのおかげで20世紀に入っても、地方分権・自治国家時代の伝統的地場産業が、他のヨーロッパ諸国より色濃く残っていたのである。

今や *Made in Italy* の誇りの一翼を担う中部マルケ州の靴産業も、そうした地場産業のひとつだ。地元の人々はこの語る。マルケはかつて農業を中心とした貧しい地域だった。やがて同地が教皇領だった18世紀後半から19世紀初頭にかけて、馬の革を底に使った部



甲革に使用するのは牛、ワニ、ダチョウ、ヘビ、象革など。スイスやポーランド、インド製などを調達している。靴素材にはほどよい柔軟性と型崩れしない性質が欠かせない。

屋履^ばきが考案されると、その成功は、勤勉で創意工夫に満ちたマルキジャーニ（マルケ人）を刺激した。人々が小さな工房を構え始め、次第に部屋履きから靴へと移行していったのはごく自然な流れであったという。イタリア社会が前述の「奇跡」に躍る間も、家族を主体とした身の丈にあった少量生産を日々黙々と続けたため、後に襲った経済危機を回避できたのだった。

その後も既存有名ブランドや海外の百貨店のサプライヤーをしながら、技を磨き続けたことも、マルケの靴産業を存続させる結果となった。たとえば、今日の「トッズ」も自社ブランドを確立する前は、米国の高級百貨店にイタリアで生産したものを納めていた。また、1975年創業という比較的若いブランドでありながら「サントーニ」が一躍イタリアを代表するブランドのひとつとなり得たのも、そうした地域の背景と技術的蓄積^{たくせき}があったからに他ならない。

そのマルケで、今も昔ながらの個人工房での手作りを守る人々がいる。紳士靴作りがとくに盛んな町・モンテグラナローにあるドリアーノ・マルクッチさん(53歳)のアトリエを目指した。

約束をしたのは雨降る冬の朝。静かな旧市街に、私を手招きするかのようなハンマーの音が響いていた。厚い木扉の向こうでは、笑顔の眩しい紳士が待っていた。ドリアーノさんは挨拶もそこそこに、昔学校で使われていた下駄箱を再生したという棚から、いくつかの靴を取り出した。いずれも個性的な色使いで、手縫いならではの丹念なステッチが際立つ。

ドリアーノさんはローマの芸術高校でグラフィックを学んだ後、母親の故郷モンテグラナローのある製靴工場に就職して社会人生活をスタートさせた。営業職を命ぜられたものの、製造部門の仕事ぶりを目にするうち、彼の感性にスイッチが入ってしまう。以来、靴製作を独学で身につけ、29歳のとき独



組み立ては中底を木型に仮止めする作業から始まる。口に含んだ釘を1本ずつ取り出して打ち込んでゆく。「工房にハンマーの音が響くと、『最高の1足を作ってやろう』と気が引き締まります」。

立に成功した。拠点として1940年代に遡る、趣ある靴工房跡も見つけた。ス・ミズーラ (su misura 注文仕立て) による高級紳士靴に特化して顧客を増やしていった。

しかし作品の美しさを追求すればするほど、より高度な技法を模索して悩む日が続いたという。そんなとき、ひとりの人物と出会った。バジリオ・テステッラ氏だ。「サントーニ」「カンパニレ」「アルティオーリ」そして「プラダ」といった著名靴店やファッションブランドのシューズ部門には、彼の弟子が必ず1人いるという、この世界では伝説の職人である。

当時テステッラ氏は末期ガンを患っており、もはや手取り足取り教える体力は残されていなかった。しかし、自らも見習い工から始めた彼は、ドリアーノさんの苦悩を察した。「私に残された時間は僅かだが、口頭で君に教えよう」。それから彼が亡くなるまでの約1年半、ドリアーノさんは師匠から

出された課題を、夜中に仕上げて翌日に提出する毎日を送った。それまで師を持たなかった彼にとって、独学では知り得なかった高度な技を習得する濃厚な日々であったと振り返る。同時に、美しい作品とは、技術の研鑽なくして生み出すことはできないと悟ったのだった。「いつも師匠がかけてくれた『ドリアーノ、勇気を持って。自分を信じる』という実にシンプルな言葉は、今でも僕の未来のエールになっている」。

彼の手がける靴は、高級紳士靴にのみ用いられる2通りの手縫い製法による。ひとつは「グッドイヤー・ウェルト製法」とよばれるものだ。最初に甲革、中底、コバ（靴の周りを縁取るパーツ）の3つを接合してから、本底を縫い付ける。コバが甲革よりも自動車のバンパーの如く一段外に張り出すため、傷が付きにくい。履きこむほど足に馴染むとの定評もある。

もうひとつの「ノルヴェエジーゼ製



甲革、中底、コバの3つを縫い合わせる工程。すくい針とよばれる専用針で穴を開けた後に糸を通す。厚みがあるため、糸を引くのにかかる力を要する。

法」は、グッドイヤー・ウェルト製法よりさらに複雑な工程を重ねる。その結果、側面にできる太い三つ編み状の縫い目に特徴がある。耐水性や防寒を目的に誕生した製法のため、無骨な印象だが、そのワイルド感に魅せられるファンが多い。いずれの製法も、彼が縫製に要する日数はおおよそ5日間。ただし採寸から顧客の要望を反映したデザイン製作、素材選び、最終的な染色と乾燥、フィッティングまで含めると、優に2ヶ月を要する。

「昔からイタリアの靴は『52の工程が要る』といわれるほど、手間をかけた贅沢なプロダクトです。でも不思議なことに、僕は作業台の前でストレスを感じません。靴作りの時間は無心になれる。いわば瞑想に近いものなのです」。ドリアーノさんの顧客リストに





亡き師匠ステツラ氏(左)と納まった思い出の写真。「悩みが生じるたび、今でも独り語りかけてしまうんですよ」とドリアーノさんは呟いた。その姿は、神に救いを求める幼子のようなに違いない。



Information

工房

Doriano Marcucci (ドリアーノ・マルクッチ)
Via Castelfidardo 25 - 63812
MONTEGRANARO (Fermo)
www.dorianomarcucci.com

アクセス

マルケ州の州都アンコーナからチヴィタノーヴァ・マルケ＝モンテグラナーロ駅まで列車で約30分。
そこからバスでモンテグラナーロ旧市街まで約30分。
www.trenitalia.com
www.trasfer.eu

「僕自身が、僕の靴のファンであり続けなければいけないですよ」とドリアーノさん。その言葉には職人としての自信と、強い使命感が表れている。

は、世界にひとつの靴を求めてやって来る人々の名前が連なる。その国籍はスイス、ベルギー、ロシアから米国、南アフリカにまで及び、政界の重要人物も含まれる。

ドリアーノさんの作業台の横には、今も祭壇のごとく飾られた師匠テストラ氏の写真がある。それは今も彼に、例の言葉を語りかけているようだった。「勇気を持って。自分を信じろ！」。

